

《 編 集 後 記 》

今、甦える「フェニックス・モザイク」

本誌編集部は、JR水道橋駅にほど近い千代田区猿樂町の平田ビル内にあります。JRを挟んで反対側には後楽園・東京ドームがあり、そちら側は文京区になりますが、その本郷界限には、日本近代建築の遺構が今もここに残されており、東大赤レンガの景観へとつらなる古びた美しいレンガ塀の佇まいを路地の随所に垣間見ることができます。

その閑静な住宅街の一郭にある「文京ふるさと歴史館」では、3月18日まで「企画展文京・まち再発見2『近代建築 街角の造形デザイン』」が開催され、その目玉の展示のひとつが建築家・今井兼次（1895-1987）の“フェニックス・モザイク壁画”（東洋学園大学）の解体遺物や、当時の氏が著したスケッチ原画などでした。

“フェニックス・モザイク”は、昭和30年代に建設された東洋女子短期大学（現・東洋学園大学本郷キャンパス）の校舎壁面を飾った陶板モザイク画で、ペントハウス壁面に三作品、昭和39年（1964）には南側壁面に一作品が製作されました。材料は陶器の破片を用い「陶片が再び甦える」ことから“フェニックス・モザイク”と名づけられたそうです。建物は平成17年に解体されましたが、壱岐坂に面した南側壁面のモザイク画は学校のシンボルとして新校舎壁面に緊結して残され、今年の新入生たちを迎えました。フェニックスのように甦える、タイル再生のシンボルのように思えてならないのです。 （仁）

※記事・写真等は株式会社黒潮社の許諾を得て転載しております。
著作権は株式会社黒潮社に帰属。記事、画像等の無断転載は一切お断りします。